

聞名仏教

第 121 号 毎月発行
(発行日) 2020 年 10 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

如来と善悪の行い

〈近代の親鸞〉といわれ
た清沢満之先生(一八六三
年〜一九〇三年)が座談で
の言葉に、

「ある月夜の夕方、先生浩
々洞の同人と共に梨を食べ
ながら話されるには、一切
の出来事は、みな如来の為
さしめたもうところである。
宇宙の活動は皆如来の仕事
である。」

と言われたとあります。こ
の言葉は、責任感が強く、
それゆえ自らの行いの善し
悪しに苦しんでいる人や、
どう生きたらよいのかと悩
んでいる人たちにはことに
有り難い言葉でありましよ
う。私も若い頃、こうした
先生の言葉は大変魅力的な
言葉でした。

しかしここでやはり問題
になるのは自分の行いがは
たして如来のなさしめたも
う行為であるかということ
です。自分の行為の善悪の
問題、ことに罪の問題です。

このことは清沢先生の『信
仰座談』(安藤州一著)の中
でも取り上げられていて、
ある人が、

「すべてのこと皆如来の導
きなりしなり、如来のなさ
しめたもうところなり。他
人が自分に加えしものは、
皆之を如来の活動として、
残念とも無理とも思わざる
なり。」

されど、自らなせしこと
をもつて、是れ如来の活動
なりとして、安心するあた
わざるなり」
と問うています。当然、こ
ういう質問が出るとしてい
ます。それに対して清沢先生
は、

「その自己をも如来の中に
滅却せざるべからず。自己
既に滅却すれば、自己の負
うべき責任は毫末もなきな
り」

と応えておられます。要す
るに自我中心の心を離れて
無我になれば、すべて如来

のなさしめたまう
ままであって、自
己の責任はない、
といわれるのであ
ります。その通り
でありましょう。ただ、そ
うなると自己中心的な自我
の心をなくすという大きな
課題があることとなります。

ですから簡単に自分の行
いがそのまま如来の行いで
あるとか活動であるとか云
うわけにはいかなないのであ
ります。

では如来(アミダ仏)と
〈行為する私〉とはどうい
う関係にあるのでしょうか。
そのことを今回は仏教に学
んでみたいと思います。

まずアミダ仏の本質は寿
命無量と光明無量でありま
す。それは本体とその用き
との関係で、体は火の如く、
用は明るさの如しとたとえ
られます。

寿命は本体であり、光明
はその用きであります。ア
ミダ仏の救済活動は光明の
用きですが、アミダ仏の本
体としての寿命無量は何を
意味しているのでしょうか。
一つには寿命が長い。い
わば時間の長さにおいてい
われます。寿命無量とは、
いつの時代も、限りなき未
来まで、どこまでもアミダ
のいのちは時間的に限りな
く長く続くという意義です。
そしてまた寿命無量は空

《念佛寺報恩講についてのお知らせ》

毎年十二月二十二日に朝・昼行っておりました念佛
寺報恩講の法要は今年(二時)のみの一回に致
します。

また今回は法話のご講師をお招きしておりません。
なにしろ狭い仏間ですから密になり、新型コロナの
感染リスクがありますので、高齢者の方、ご持病をお
持ちの方は今回はお参りを避けて頂いた方がいいかと
思います。報恩講の勤行は執行致します。

間的にどこまでも広く、一切のいのちにいき渡っていて、「廣大にして辺際なし」（世親「浄土論」といわれ、

どこどこまでもどこまでという際がない。このことを宗祖は、

「この如来微塵界にみちみちたまへり」（「唯信鈔文意」と仰せられています。

いわば、寿命無量は万物のいのちとしていき渡り、万物をして万物たらしめて

いるはたらきでありましよう。これについては、『涅槃經』（寿命品）に

「阿耨達池、四大河を出す。如来またしかなり、一切の寿を出す。一切人天の寿命の大河、如来の寿命の大海に流入す」

と説かれています。「一切の寿を出す」ですからすべての存在は寿命無量（如来）

において生まれ、寿命無量によって成立し支えられているといえます。山あり、

樹木あり、生物あり、人間あり、あるいは地球あり、

星々あり、みな寿命無量において成り立っているといえましよう。

寿命無量は物質の領域のみならず、意識の領域も包んでおりましよう。

そこでまず一番身近な存在としてのこの私。これも

アミダ仏のはかりなきいのちが働いて成り立つのでありましよう。ですから

万物も人間もこの私も、アミダ仏のいのちを離れては一瞬も存在し得ないのであります。

このように、有限なすべての個物は寿命無量と離れがたく一つでありますから、

アミダ仏と私（個物）は分けることができない、つまり不可分であります。

しかしながら、私はアミダ仏ではありません。私は

アミダ仏に於て成り立っているけれども、個物である私はアミダ仏ではない。一

つの物に過ぎません。バラの花はアミダ仏のいのちの

働きに於て咲いているが、しかしバラはアミダ仏と同じではない。すなわち不可

同であります。人もバラもアミダ仏とは不可分でありますが同時に不可同であり

ます。

アミダ仏と人は不可分不可同であるという真理は非常に大事です。それは私から云うと「アミダ仏のいのちの外に自己はない」とい

う真理です。これは人間存在の根本真理であります。この真理に目覚めるところ

にこそまことの平安があります。平等があります。

たとえば人間苦の中でも老病死の苦しみは最も大きな苦であります。なぜそれが苦しみであるかという

と、私たちが老い病み死ぬという有限な命しか知らず、死すべき命をこそ自己として

これに非常に深く愛着しているからです。

ですから、それを妨害する老病死が苦となるのであります。そこで、迷っているとは、生まれて死ぬ有限

ないのちしか知らないことといえます。いわば量りな

きいのちこそ私の主体であることを知らないからです。

しかもこの有限な身体的ないのちは様々な属性をも

つています。美醜などの姿や形の違い、あるいはいろいろな才能の有る無し、また健康であるかそうでないか、などさまざまな差違があります。その差違がある

それぞれいのちしか知らないから、優劣や差別をつけ、それに悩まされたり、

他者と自分を比較して誇つたり軽蔑したりする罪が跋扈します。それは平等な根

源的なアミダのいのちを知らないからであります。

アミダ仏のいのちのほか

に自己無しという真理は、人間（衆生）は基本的に平等であること、それこそが

いのちの本質であることを教えられます。「人間みな平等」ということはここでこ

そ言われるのであって、こ

こを見ないで平等といつてもむしろそれぞれの差違の方が現実としか感じられま

せんから、「人間は平等である」といつても単なる理想としてのスローガンにしか

聞こえません。

では本題であるアミダ仏と人の関係の中で、アミダ

仏と（行為する人）の関係はどうなのでしょいか。

岩石も樹木も人間も個物

ですが、人間には意識があります。心があります。それが単なる物質である岩石

などとの違いです。アミダ仏の関係で言えばともにア

ミダ仏と人とは不可分不可同ですが、人間（衆生）は

意識がある点が違います。意識があるということとは、

人間には自由があるということ

です。いわば判断し選択して行う自由があると云うことです。これが意識の

ない単なる「物」との違いです。意識のない石ころは

自由がありませんから、自らで移動することも場所を選

ぶこともできません。ただ、人には自由がある

と云うことは同時に責任がある

と云うことです。どう

いう判断をし、何を選び、どう行動するか、というこ

とが問われてくるわけです。ここに善悪の問題が出てき

ます。

ではどう自分の行動を判断するかですが、それは自

我中心的に気ままに判断してもかまわないということではないでしょう。

中には、この世には拠り処とするような道理や真理というものは無い。自分の人生は、自分の快不快に従っていけば良いのだというような虚無的な考えもあります。

ですが仏教は自分の行動における判断や選択には従うべき真理があるとみています。それは先ほど言いました不可分不可同という阿弥陀仏と人との関係の真理とも表現されましょう。いわゆる「**摂取不捨の真理**」(浄土文類聚鈔)です。

この真理に目覚め、この真理に沿って生きるか、この真理に背いて生きるか。この真理を人生活活の上にとれほど正確に反映しているか、あるいは逆らっているかが、そのつど問われているのでありましょう。摂取不捨の真理を思惟と行動にどう反映しているのかがそのつど問われております。そこに人としての生きがいがあり、喜びがあり、努力

があり、責任があります。いわば行いの善悪が問われているのであります。

ですからアミダ仏と人の摂取不捨の真理は、人はそれをどう映すかという関係です。このことはアミダ仏と人との関係は決して逆にはならないという関係でもあります。不可分不可同という真理(アミダ仏)と、人においては、人はアミダ仏に従うべく定められているという関係です。そこでアミダ仏と人の関係は一言で言うと「不可分不可同不可逆の関係」といわれるのです。

こうして私の行為はアミダ仏の行為とは単純に言えないのです。私の行為の善悪、浄穢は摂取不捨の真理(あるいは自他一如の真理)を何処まで反映しているか、あるいは背くかというところでもいつも善悪が問われているのです。

ですから自分の都合で人を憎んだり、他者と比較して差別したり、自分より優

れている人を嫉んだりする思いや行いは、自我愛が中心になった行いですから、決してアミダ仏の行為ではありません。摂取不捨の真理に背き、我執我愛に根ざした悪しき行いであります。自我しか知らない自我中心的な考えですから煩惱の行為です。しかも真理に背くとそこに報いがあり自分も人も苦しみ悩み、そればかりか社会を害する行いにもなります。

ただし、私の自我がアミダ仏との摂取不捨の真理(不可分不可同)を十分に映す時は、私の行為はアミダ仏と一体になった行為であると言えましょう。しかしそのような真理を完全に映すような行いはごく一部の聖者にのみ可能であって、煩惱熾盛の凡夫にはとうていのぞめません。

カトリックで聖人といわれた聖フランシスの生涯を綴った本の名に『完全な鏡』というのがあります。イエスとかフランシス、仏陀とか龍樹などという人は真

理を十全に自らの身の上に見取ったような生き方をした、そういう聖者であったと云われています。

日本の禅の高僧の歌に、「生きながら 死人となりて なりはてて おもいのままに するわざぞよき」とあり、また浄土教の高僧一遍上人には、「仏こそ 心と身とのある じなれ わが我ならぬ ころ振舞」と詠っています。これなども自分の行為と仏の用きを表しています。ただこういう境地は特別に優れたお方のことであって、普通はともそうはなりません。またたとえ一時的になれたとしても、凡夫はすぐに元の振る舞いに戻ってしまいます。

ただ私たちのような凡夫であっても、この摂取不捨の真理にほのかにでもであったなら、その真理の功德は極く少しづつであってもその人の生活に反映してくるといえます。(了)

【住職雑感】

趣味はもっぱら音楽鑑賞。これは何の努力もいらぬ至って受け身の趣味である。ただCDやYoutubeで聴きさえすればよいのである。怠け者の私にはうってつけ。音楽鑑賞といってもコンサートに行くことは殆どない。家の方がリラックスして聴けるから。そしてゴルフや絵画の趣味のような訓練もお金も殆どいらぬ。音楽鑑賞といってもバッハを聴くのがどこまでも主である。300年近くも前の、しかも遠い異国(ドイツ)のバッハの作品がいたく心に響く。本当に不思議である。人の心は場所を越え、時代を超えて響き合うのはどうしてか。もし人の心がそれぞれ各個別々であるなら、深く共感するという事は不可能ではないか。人の心は深いところでつながっているのではなかるうか。無意識の世界ではつながっていて、心の領域は広大であり、一切衆生といわれるように人間だけではなく、生き物全てにつながっているときえ思わしめられる。「音楽は世界の本質を示す」という賢者の言葉があるが同感である。それにしてもバッハは何と多くの悲哀あふれる美しい曲をつくったことか。とても人間業とは思えない。「音楽の神が受肉した人」と云わざるをえない。バッハがそうなら、イエスは神が受肉した人、仏陀は普遍的ないのちの真理が受肉した人といってもいいのではないか。

松並語録と味わう

からない。一方、仏の光（教法）は凡夫の心の深い闇まで見通して、私たちの姿を指摘してください。

○ 落ちると見込んで下されたのも仏様なら、その者を助ける成就して下さったのも

仏様なり、南無阿弥陀仏なり。

箸持つ世話もいらぬ。口にね

じこんでもろうていながら、

いるのに吐き出す。とにも角

にも今の我が身の仕合せを仰

ぐばかり。

（『松並松五郎念仏語録』より）

＊ ＊

《領解》

ここに真宗の要が出ている。

「落ちると見込んで下された

のも仏様なら、その者を助け

ると成就して下さったのも仏

様なり、南無阿弥陀仏なり。」

と言われる通り、私のこのま

までは闇と苦の領域に留まり

また墮ちるのであり、私が見

たとえ多少の善をなしたとし

ても、浄土へは到底参れぬ流

転の身であるとのこと。

このことは自己反省で分か

るものではない。自己反省は

自分の知性で自分を反省する

のであって自分の知性の光が

届く範囲しか自分のことは分

と殊勝に思っている、心根は「自分一個の楽を求めている」のである。しかもどこまでも自分の楽しか求めているその自分に気づいたとしてもその自分をどうすることもできない、行き詰まっている人間、それが私の姿である。それを「墮ちる汝」と知らせてくださいるのが仏の光である。仏の教法である。

次に「その者をタスケル」と仰せくださるのも仏様であると

と言われる。

墮ちる者、助からぬ者を憐れんでくださって、そんな者をこそ助けようと立ち上がってくださった。こんな私を仏になさんが為に、五劫永劫のご修行をして仏になさしめたもう願力を成就してください

たのが阿弥陀仏。

そのアマダ仏が南無阿弥陀仏となつて、この私の口に南無阿弥陀仏をねじ込んで、称え現れてくださる今の一声。それが耳に聞こえる南無阿弥陀仏である。

「ねじこんで」という表現がまた有り難い。私たちは念仏を申すような者ではない。

人の悪口は軽々と言うが仏のみ名を称えるような殊勝な心はない。念仏を好むような人間ではない。念仏しないのが凡夫である。

その者に「これ一つでタスケルから、これを称えよ」と、飲むのを嫌がる重病人に薬（南無阿弥陀仏）を飲ませようとねじ込んでまで飲ませて助けようとされる。こうして念仏の一声でも称えることが起るのである。

また「箸もつ世話もいらぬ」といわれるのが有り難い。浄土に生まれるのに、私の方からは為さねばならない条件はチリばかりも要求されていない。仏になる種（因）はすべて如来法蔵様が成就され、成就された仏因（本願成就の念仏）を私にねじ込んで与えてくださるのである。私は全く幼児と同じ。私が助かる仕事は全面的に如来法蔵様がしてくださいだったのである。あとは唯「汝の往生は凡て如来が責任を持つ。引き受けた」との南無阿弥陀仏の大悲を聞くだけ、仰ぐだけである。

ここで注意すべきことがあ

る。アマダ仏が南無阿弥陀仏を成就して、広大な大悲心より「汝のままなりでタスケル」と仰せくださるのであって、南無阿弥陀仏のお助けを言わずに、アマダ仏は私に単に「汝はそのままよい」といわれるのではない。

よく真宗のお説教を聞いて「このままの私でよかった」と言つて自分の方ばかりを喜ぶのは注意を要する。このままの私で善いことはない。このままの私なら罪深いだけ、助からぬだけである。

このような私を全面的に引き受けたもうアマダ仏の広大な憐れみこそを「ああ有り難い」と喜ばしていただくのであつて、アマダ仏の不可思議の大悲をそつちのけにして、「私はこのままでよかった。これが真宗だ」というのは邪見である。

このままの私は煩惱の深い身であつてこのままで善いこととはないのである。どこまでも浅ましい、お粗末な身なのであり、お恥ずかしい身なのである。この身にかげられて

いる大悲の本願こそが有り難いのである。

（了）